

異文化交流過程に見られる葛藤 —文化リテラシー育成のプロセスに着目して—

近藤 有美 ・ 文野 峯子

Conflict in the Cross-cultural Communication Process — A Process of Fostering the Literacy of Interpersonal Culture —

KONDO Yumi BUNNO Mineko

This paper attempts to analyze how the literacy of interpersonal culture is cultivated through interaction with others. In this paper we follow the idea of the literacy of interpersonal culture (Hosokawa 2007) and we define that the process of cultural understanding is a search for one's interpersonal culture through communication. To clarify the process of cultural understanding, we analyzed the interchange between Japanese and Korean students on an internet bulletin board. The results of the analysis were as follows: (i) Conflict is a necessary factor to cultivate the literacy of interpersonal culture; (ii) True understanding is brought out if people take a flexible attitude towards others after experiencing conflict; (iii) True understanding involves not only understanding others but also self-understanding; (iv) Exchanging information which exists out of communication does not lead to true understanding.

1. はじめに

1.1 異文化理解

IT化、ボーダーレス、グローバル化が急速に進む中、教育の現場でも国際的な視野の育成が求められている。地域コミュニティでも国際交流のイベントが行われたり、小中学校の総合学習の時間に異文化交流行事が行われたりしている。これらのイベントでは、各国料理の教室が開かれたり、簡単な外国語を覚えたり、その国のあそびが紹介されたりする。ここでは、「料理」、「ことば」、「あそび」がその国を象徴する「文化」として扱われ、その「文化」を知ることが「異文化理解」であると考えられている。

このような「文化」に対して、日本語教育では近年、文化とは「コミュニケーションの枠組みの外側にある知識・情報としてのものを指すのではなく、コミュニケーションという行為自体がすでに社会に対して学習者が自己をひらいていく行為」（細川 2002：v）であると考えられるようになってきた。このように考えられる文化は、前者の「文化」とは異なり、教えられたり説明されたりするものではなく、自ら認識したり発見したりするものである（川上 1999、河野 2000）。では、この後者のコミュニケーションを通じた文化の理解はどのように導かれるのであろうか。

1.2 文化リテラシー

2005年9月、日本で「ことば・文化・社会の言語教育」の国際研究集会が開催され、言語教育と文化の関係について活発な議論が行われた。そこでキーワードの一つとして挙げられたものが「文化

リテラシー」である。この文化リテラシーという言葉であるが、「Cultural Literacy」と「文化リテラシー」という日英の表記では、その概念を異にすることに注目したい。

英語での表記の「Cultural Literacy」は、1980年代前半に、アメリカバージニア大学英語学科教授 E. D. Hirsch によって造られたものである（クラムシュ 2007）。Hirsch は、大学において読解力の調査を行った結果、文章の読解力を左右するものは背景的知識の違いであることを発見した。その発見から Hirsch は、読解能力の向上のためには、技術的な訓練よりもむしろ背景的知識を身につけることにあるという「Cultural Literacy」の概念を導き出した。この Hirsch の「文化」について、クラムシュ（2007）は、フレイレの教育観を引用し、「この『銀行型教育』的な捉え方は奇異で夢想的なものであるように思われる」（同書：3）と批判している。

一方、日本語の「文化リテラシー」は、「個の文化」（細川 2002、細川 2003、細川 2007）という考え方によるものである。細川（2007）は、「文化を知識・情報として知ることを目的とせず、相互のコミュニケーション活動を通して、それぞれの持つ表象としてのイメージを交流させ、そのことがそれぞれにとってどのような意味を持つのかを当該のコミュニティとして検討し続けること」とし、「それぞれの持つ固有の文化、すなわち『個の文化』を相互に開陳し交流しあうことができる能力が、ここでの『文化リテラシー literacy of interpersonal culture』と称すべきものであり、言語教育はまさにこの『文化リテラシー』という力の形成のためにある」（同書：41）と述べている。

このように文化を捉えるようになった背景には、日本語教育における学習観の見直しがある。学習とはこれまで、「人がその『頭の中』に知識を体系的に貯蔵し、将来、何らかの課題場面に直面したときに、過去に獲得した適切な知識を効率よく引き出せるようにしておくことだと考えられてきた」（西口 1999）。この学習観は、心理学、教育学、そして日本語教育においても長い間主流を占めてきた（山下 2005）。しかし、「人間の精神発達を個人の内部の系だけで生起していることは考えず、社会や文化といった個人を取り巻いている外的諸変数との間で相互に影響し合う関係として扱うべきである」（佐藤 1999：6）というヴィゴツキーの考え方から、学習は他者との相互作用的な活動の中で実践されていくと考えられるようになってきたのである。このような学習観で「文化リテラシー」を捉えると、「文化リテラシー」とは他者との相互作用を通じて獲得できる能力であると考えられることができる。

1.3 本稿の課題

本研究では、「文化」および「文化リテラシー」について細川（2007）を踏襲し、異文化理解のプロセスとは、コミュニケーション活動を通して、相手文化を認識し、自文化との相違や接点を模索していく作業のことであると定義し、異文化理解が導かれるプロセスに注目する。そして、コミュニケーション活動に現れたやりとりを分析し、「相違や接点を模索していく作業」とは具体的にどのようなことなのかについても分析を試みる。

本稿では、具体的に次の4点を研究課題とする。

- ①他者との接触という体験は必ず理解を導くのか。
- ②本物の理解につながらないプロセスがあるとすれば、それはどのようなものか。
- ③理解につながるための必須の要素は何か。
- ④その要素は真の理解にどのように関わるか。

2. 研究対象とした実践

本実践は、愛知県の大学で学ぶ日本人大学生と、韓国大邱市の大学で日本語を主専攻または副専攻とする韓国人大学生との間で、次のような環境設定で行われた。

- ① 交流期間——1回目…2007年4月～6月
2回目…2007年9月～12月
- ② 参加者 ——1回目…日本人大学生 32名（異文化教育関連授業受講生）
韓国人大学生 27名（日本語関連授業受講生²⁾
2回目…日本人大学生 7名（有志）
韓国人大学生 27名（日本語関連授業受講生³⁾
- ③ 方法——インターネット上の無料掲示板を利用し、あるテーマについて双方の学生が日本語で意見を書き込む。交流は、学生がテーマ決めから行い、自主的にやりとりを行う形で進めた。
- ④ グループがとりあげたテーマ
——1回目：牛乳事件、結婚適齢期、整形手術 A、恋人の携帯電話チェック、他
2回目：整形手術 B、愛国心、就職問題、ネット上での誹謗中傷、他

1回目の交流では、日本側、韓国側ともグループを7つ作り、交流はそのグループ同士で行った。グループ同士の交流ではあるが、一つの掲示板を全員で共有していることから、それぞれのグループによって書き込まれた意見を他のグループメンバーは自由に読むことができる。あるテーマについてそれぞれグループで話し合った後、意見を掲示板に書き込み、相手側の書き込みを読んだグループが、同様の作業を繰り返していった。日本側、韓国側それぞれが、基本的に週1回のペースで書き込みを行った。

2回目の交流では、韓国側は1回目同様グループで、日本側は個人で交流を行った。これは、韓国側は授業の一環として行ったのに対し、日本側は授業外活動としてボランティアを募ったためである。

3. 分析結果

1回目と2回目のそれぞれの交流の直後に事後アンケートを実施した。アンケートからは、「相手のことがわかってよかった」、「いろいろ話せてよかった」など、交流を高く評価していることがうかがえた。しかしながら、下記の A～C に見られるように、交流中に何らかの葛藤があったことを示すものもあった。

- A：ありふれたテーマよりおもしろいテーマで話し合いたくて「愛国心」というテーマを選択しましたが、やっぱり愛国心とかナショナリズムはむずかしいテーマでした。予想外に討論が激しくなりました。（韓国）
- B：日本人とメールをやりとりしたことはありましたが、一つのトピックに対して意見を取り交わしたのは初めてだったので、すごく良かったです。最初、私たちの意見を書いたとき、どんな返事がくるかととても楽しみに待っていました。しかし、返事を見て、自分が考えたのと違ったので少し驚きました。攻撃的で、難しい表現が多くてあわてました。（韓国）
- C：正直、驚いたところはたくさんありました。国によって、育てられた環境によって、こんなに意見が違うとはびっくりでした。たぶんお互い結構熱くなったと思います。一番くやしかったのは、私がネットでわざわざ調べた資料が、簡単に「信じられない」と言われ、認めてもらえなかった

ことです。(韓国)

(A～Cは、学生の記述をそのまま転写したものである。表記の誤りは修正せずそのまま掲載している。)

交流に対する「よかった」という評価と上記のような葛藤の差は、やりとりの内容とどのように関係しているのだろうか。

3.1 円満な収束

書き込み例1は、実際に掲示板に書き込まれたものからの抜粋である。これらの書き込みからは、相手文化を肯定的に評価する態度や相手文化と自文化の類似点を強調する態度がうかがえる。これらは、「違い」に着目するか、「類似点」に着目するかという点では異なるが、いずれも「円満な収束を志向している」点では共通している。このような「和やかなやりとり」では議論が継続されることなく、テーマはそのまま収束している。

また、「和やかなやりとり」では、書き込み例2のように、一方が情報を求める質問をして相手側がそれに答えるというやりとりで進行していることが非常に多かった。このようなやりとりでは、相手側の回答に対して「同じですね」「ちょっと違いますね」といった感想に留まり、意見が対立することはない。このようなやりとりの中では、「日本では」、「韓国では」という言葉の使用が目立ち、「文化」はあくまでコミュニケーションの外側にある知識や情報であると考えられ、それが変化していくことはなかった。

書き込み例1

	テーマ	国	書き込み内容
a.	整形 A	日本	韓国のように大ぴろげているのは良いことですね。日本も告白しやすいようになればいいんですけどね
b.	就職	日本	日本でも子どものことを何でも決めてしまう親が多くいるといわれています。韓国のそれと似ていますね！
c.	就職	韓国	親が子どもを愛する心は世界が同じですね

書き込み例2

	掲示板への書き込み内容（本文をそのまま掲載）＜就職グループ＞
①韓→日 2007.11.28 (韓国側からの情報求め)	就職面接の時日本で一番重要なことは何でしょうか?? 韓国は語学能力も重要だが、外貌も多くのパーセントを占めます。日本はどうですか?? 最近韓国も競技(景気?)がよくなって採用が少しずつ増えていると言います。韓国の大学生たちは4年生になると就業準備で心配をして、ストレスもたくさん受けます。日本も就業の時大企業を好むんですか??
②日→韓 2007.12.3 (日本側からの情報提供)	こんばんは。就職試験の面接で一番大切なことは、自分の意思や将来の目的を明確に面接官に伝えることだと思います。面接ではいろいろと質問されるので、それに対応的に答えることが大事だと思いますよ。語学能力や、外貌は、そのようなもう力が必要な関連の就職先によると思います。一般的な企業では、外貌が重視されることは無いと思います。

大企業への就職ですが、日本でも人気があるます。韓国の大企業というと現代とかサムスンとかですね。僕が住む地域にはトヨタ自動車という大企業があるけど、とても人気ですよ。給料やその他の保障が安定しているのと、不景気にも強いので。

3.2 葛藤

書き込み例3を見ると、前述の「和やかなやりとり」とは明らかに異なり、異質性を明確に示す書き込みが見られる。これを本稿では、「葛藤のあるプロセス」と呼ぶ。この「葛藤のあるプロセス」では、相手文化や相手の考えの異質性に注目し、その違いや対処方法に戸惑う気持ちが明示的に記述されている。

書き込み例3のdは、「愛国心」をテーマに交流している日本側学生の書き込みである。この書き込み直後に、韓国側は「にわかファンが増殖して腹立たしいと言いましたが、それって韓国に腹立たしいと言ってるんですか」と質問している。このように、「葛藤のあるプロセス」では、相手の主張に説明を求めたり、自己の主張の詳しい説明を試みたりして、テーマについての議論を継続させている。

佐藤（1999）は、真の学びが起こるためには、「自分とは異なった考えを持った異質な他者」（同書：177）の存在が大前提であると述べている。この場合の他者について佐藤は、「わかり合える関係を否定したところに存在」（同書：13）すると強調している。このことを踏まえ今回のやりとりを見ると、「葛藤のあるプロセス」では日韓双方の学生がお互いに「異質な他者」として存在していると言えるであろう。この「異質な他者」の存在により、「葛藤のあるプロセス」には真の学びが起こるための土台ができていたことになり、ここに「円満な収束を志向するやりとり」と「葛藤のあるプロセス」との大きな違いがあることが示唆された。

書き込み例3—葛藤のプロセスが見られるもの

	テーマ	国	書き込み内容
d.	愛国心	日本	代表の試合があると、ルールも何も知らない人が、ユニフォームをきて <u>馬鹿騒ぎ</u> 。にわかファンが増殖します。 <u>腹立たしい</u> 。日韓大会の韓国映像を見ていたときも同じように感じました。
e.	整形B	日本	日本人は昔から自然の美しさを大切にします。（中略）整形すれば誰でも美人になれます。誰でも同じ顔になれます。 <u>まるで大量生産されるロボットの様です</u> 。
f.	整形B	韓国	日本では盛んに整形が行われています。なのにそんなことまでちゃんとした資料なしに（私たちの書き込みを）否定するのは <u>ちょっと理解できません</u> 。

3.2.1 葛藤が学びに

葛藤が見られたグループの記述を時系列で見えていくと、葛藤が必ずしも相手文化理解や自文化の認識に直接つながるわけではないことがわかった。ここではまず、葛藤から文化リテラシー獲得の兆しが見られた「愛国心」グループについてのやりとりを検討する。

愛国心について議論したグループでは、やりとり開始当初から異なる価値観のぶつかり合いがあった⁴。韓国側グループから「愛国心」というテーマが提案されてすぐ、日本側からの書き込みに「異なる価値観」が明確に示されている（巻末資料 ②日→韓 2007.11.1 参照）。韓国側学生が当初抱いていた日本人の愛国心と、日本人学生 H の愛国心とが大きく相違していることが H の 2007 年 11 月 1 日の書き込みからもうかがえる。この書き込みを読んだ韓国側グループは、授業時のグループの話し合いで非常に戸惑いを見せていた。その一つは「こんなに意見をはっきり言う日本人がいるのか」という点であった。このように愛国心グループは、「異なる価値観の出会い」によりやりとりが開始されている。

次に、第一回目の H の書き込み（2007.11.1）を読んだ韓国側グループは、次の書き込み（巻末資料 ③韓→日 2007.11.7）の中で「無条件的な権利を望むなんて、それは違うんじゃないかと思います」と自身の価値観の正当性を主張し始める。両者の間では、「戦争で戦うことは愛国心なのか」、「国際大会でのスポーツ応援は愛国心なのか」が議論の中心的話題となり、それを巡って両者は、「相手の主張内容を確認」し、「自身の価値観の正当性を主張」していく。その作業を進める中で、両者の違いは明確化していった。

愛国心のテーマは当初、韓国側グループ（3 名）と日本人学生 H との間でやりとりされていた。やりとりが始まって 3 週が過ぎたとき、「韓国側がグループで、日本側が個人」というやりとりに対して、韓国側学生より「他の日本人の意見も聞きたい」という希望が出た。そのため、日本人学生は自分の担当以外のグループの話題でも興味があるものには書き込みを行うことになった。愛国心のテーマには、2007 年 11 月 26 日に、日本人学生 O と M からそれぞれ書き込みがされている。O も M も H とは異なる価値観を書きこんでおり、また、O と M の捉え方も異なっている。この二人の書き込みの直後の韓国側の書き込みには、「やっぱり愛国心についての話は国によっても人によってもその意味と深さが違いますよね。H さんと同じ意見を持っている方々は韓国でも相当いると思います」とある。これは、やりとり開始当初、「韓国人は…」、「日本人は…」と捉えていたことと大きく異なる。日本人も多様であることに気づき、さらに、それが自国韓国でも同様であることに気づき始めている。つまり、文化を実態が伴わない抽象的な情報としてではなく、それぞれが持つ固有のもの——「個の文化」（細川 2007）と捉えるようになったのである。

上述のような学生の変容は注目に値する。従来の異文化交流では、「円満な収束を志向するケース」に見られたように、ステレオタイプで最大公約数的なイメージや枠組みで相手を捉え、それにより異文化および自文化を理解しており、その能力がリテラシーであると考えられていた。しかし、「愛国心」グループは、この葛藤のあるやりとりを通じて、外から与えられたイメージを鵜呑みにするのではなく、自分自身で考え、葛藤を通してその考えを修正し、他者および自分を理解するようになっていった。ここには、自他を相対的に認め、自己の理解を深める兆しが見られる。この過程は、細川（2007）の「文化リテラシー」の力の形成と見て取れるのではなかろうか。

3.2.2 葛藤がステレオタイプの強化に

「愛国心」グループ同様、「整形手術B」グループにも葛藤のプロセスが見られた。しかし、「愛国心」グループとは異なり、「整形手術B」グループでは、その葛藤から文化リテラシー獲得へとつながる様子は見られなかった。以下で、「整形手術B」グループについて分析する。

整形手術をテーマとしたやりとりでも、整形手術を是認する韓国側と否定する日本側でやりとり開始直後から激しい意見のぶつかり合いが見られた。しかし、整形手術のグループでは、最後まで「自己の価値観に固執する態度」が見られた。このグループのある韓国人学生は次のように事後アンケートに記述している。

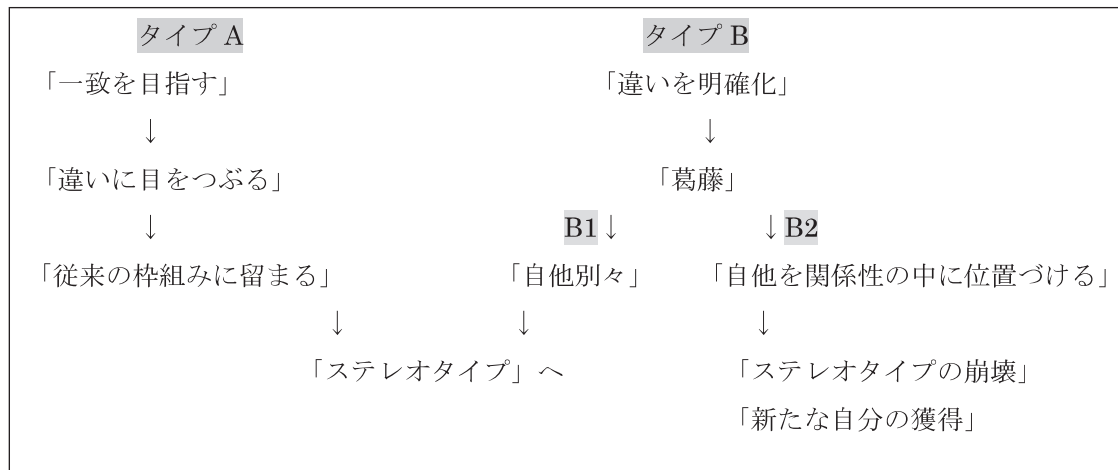
一番くやしかったのは、私がネットでわざわざ調べた資料が、簡単に『信じられない』と言われ、認めてもらえなかったことです。頑張って調べた資料だったので、私はその『信じられない』理由が知りたかったです。その信じられない理由がとても聞きたかったので、早速返事を読んでみました。相手の反論は、具体的な資料なしの予想でした。ここで思ったのが、日本人としてのプライドがあるから、きれいごとを言っているんじゃないかなと思いました。これは個人的な考えです。(韓国・男)

上記学生の言う資料とは、「日本では整形手術は一般的ではない」という日本人学生Mに対して、彼が世界の整形手術に関する資料を提示し、韓国よりも日本の整形手術件数が多いことを示したものである。しかし、その資料を見た日本人学生からは、「整形手術のサイト見ました。しかし、これを見ると、韓国と日本の整形手術の医師の登録人数が違いすぎます。韓国は17人で、日本は69人です。これでは、正確なデータとは言えないと思います。何より私の周囲（親、友人、親戚、職場など）に、整形手術を受けている人は一人もいません。なので、なんだかこのデータは信じられません」と書き込まれた。その後も両者の意見の対立は交流終了まで続くものとなった。このやりとりで見られるように、自己の価値観に固執しすぎると、相手の説明を傾聴する姿勢を失わせることに繋がる可能性があり、相手に耳を傾けなくなることにより、さらに自己の殻に閉じこもり、自分が正しいという信念を強化していくのではなかろうか。

4. まとめ

本研究では、掲示板というツールを使って、日韓の学生同士が互いを知ることがを目的にやりとりを行った。そのやりとりを「文化リテラシー」という視点で分析してみると、やりとりには大きく分けて2つのタイプ——「相手との類似点に注目することにより意見や考え方に一致を目指す」タイプ（表1：タイプA）と、逆に、「相手との相違点に注目し、違いを明確にしていく」タイプ（表1：タイプB）が見られた。タイプAは、違いに注目することを避け、円満な収束を志向するタイプである。このタイプは、自己内省や他者について捉えなおすプロセスも生じにくいため、これまでもっていた他者についてのイメージを強化しかねない。

表1 「文化リテラシー」の過程



興味深いのは、タイプ B に 2 つの異なるプロセスが見られたことである。葛藤のあるプロセスの 2 つのグループの分析から、両グループとも相手の異なる価値観に出会い、ショックを受け、互いの主張の確認作業を経て違いが明確になるというプロセスは共有されていた。しかし、その後のプロセスに違いが見られた。愛国心グループでは、自他のズレを引き受け、自他を相対的に捉える方向へと進んでいた（表 1：B 2）が、整形手術グループは、自身の価値観に固執し、さらに自己の信ずる価値観を相手に理解させようとする方向へと進んでいた（表 2：B 1）。その結果、前者の葛藤には自己の理解を深めることにつながる兆しが見られるが、後者にはその兆しが見られなかった（表 2）。「文化リテラシー」という観点でみると、葛藤のあるプロセスであっても、最終的に自己の価値観に固執してしまうケースは、むしろ見解の一致を目指すタイプ A に近い結果につながる可能性があることが示唆された。

表2 葛藤のあるプロセスのバリエーション

	愛国心グループ	整形手術グループ
①	異なる価値観に出会う	異なる価値観に出会う
②	互いに自身の価値観の正当性を主張 同時に相手の主張内容の確認	互いに自身の価値観の正当性を主張 同時に相手の主張内容の確認
③	違いの明確化	違いの明確化
④	自他を相対的に捉える 自己の理解を深める 他者との関係性の中に自己を位置づける	自己の価値観に固執 自己の信ずる価値観を相手に理解させようとする

本研究から、「文化リテラシー」の獲得には、まず、異質な他者と出会い葛藤を体験することが重要であることが示唆された。しかし、葛藤の経験のみでは「文化リテラシー」の獲得には直接つながるわけではないことも導かれた。葛藤体験を通して、他者を理解しようとする態度を養い、自分の考えを修正できる柔軟性を持つことが、本物の理解につながる鍵となる。また、本物の理解には、他者理解だけでなく自己理解も含まれることが導かれた。

今回の実践を通して、葛藤体験が他者理解につながるための鍵であり、要素であることが示された。しかし、今回の実践では「葛藤のあるプロセス」を体験できたのは2つのグループのみであった。今後は、「葛藤のあるやりとり」にはどのような仕掛けが必要であるのか、教師の役割を含めた研究が必要であると考ええる。

註

- 1 フレイレ（1979）は、教育者と被教育者の垂直な上下関係を次のように例えて批判している。教師は、空の銀行口座のような生徒に、まるで貯金を繰り返していくように知識の伝達を行っている。このような教育を彼は、「銀行型教育」と呼んでいる。
- 2 受講学生の日本語レベルは、初級後半から上級レベルである。
- 3 受講学生の日本語レベルは、1回目と同様である。
- 4 巻末の「愛国心」グループのやりとりの全記録を参照。

参考文献

- 川上郁雄（1999）『『日本事情』教育における文化の問題』『21世紀の日本事情』1、くろしお出版
- クラムシュ・クレア（2007）『異文化リテラシーとコミュニケーション能力』『変貌する日本語教育—多言語・多文化社会のリテラシーとは何か』くろしお出版 2-26.
- 河野理恵『『異文化コミュニケーション』としての『日本事情』』『21世紀の日本事情』1、くろしお出版
- 近藤有美、文野峯子（2008）『異文化交流過程に見られる葛藤—インターネット上での日韓交流の事例から見えること—』『日本語教育学世界大会2008・第7回日本語教育国際研究大会予稿集第1分冊』144-147.
- 佐藤公治（1999）『対話の中の学びと成長』金子書房
- 西口光一（1999）『状況的学習論と新しい日本語教育の実践』『日本語教育』100号、日本語教育学会、7-18.
- フレイレ・パウロ（1979）『被抑圧者の教育学』、小沢有作他訳、亜紀書房
- 細川英雄（2002）『ことばと文化を結ぶ日本語教育』凡人社
- 細川英雄（2003）『『個の文化』再論—言語文化教育の課題と展望』『21世紀の日本事情』5、くろしお出版
- 細川英雄（2007）『日本語教育における『学習者主体』と『文化リテラシー』形成の意味』『変貌する日本語教育—多言語・多文化社会のリテラシーとは何か』くろしお出版 27-46.
- 山下隆史（2005）『授業の中の相互行為を理解する』『文化と歴史の中の学習と学習者：日本語教育における社会文化的パースペクティブ』西口光一（編）、凡人社、123-143.

巻末資料

	掲示板への書き込み内容（本文をそのまま掲載）＜愛国心グループ＞
①韓→日 2007.10.29	<p>啓明大のグループCです。私たちは「愛国心」について意見交換したいと思います。Hさん、Aさんよろしくお願いします。韓国は現在、休戦国です。そして、韓国の男は軍隊に行きます。ワールドカップとか国際スポーツ競技で韓国人の熱い応援を見てもわかりやすいんですけど、韓国人は愛国心が強い民族です。もし、戦争が起これば50%以上の人々が参戦すると思います。愛国心について日本人はどう思いますか？韓国では日本人は愛国心が弱くて個人主義だと言われてます。</p>
②日→韓 2007.11.1	<p>Kさん他皆さんへ</p> <p>個人主義ではないと感じます。しかし愛国心に関してはその通りです。と言うか、無いに等しいと感じます。日本には徴兵はなく、御国のために戦うなどといったことは、考えられません。戦争が起きれば、国が国民を守るのが当然であり、直接戦うのは自衛隊の仕事だと考えます。日本国民であり、日本に在住していれば守られることは、愛国心の有無に関わらず無償の権利です。第一に日本国とは命を賭してまで守る物だとは思えません。</p> <p>もし戦いに赴くのであれば、それは御国のためでなく、身近な大切なもの（家族）などを守るためです。皆さんもご存知だとも思います、神風特攻隊。彼らも、守るべき物の為に戦いました。愛国心ゆえでは無かったと思います。韓国の軍人もそうなのではないですか？話は前後しますが、そもそも「愛国心」とは何なのでしょう？パトリオット迎撃ミサイル・・・・・・これも愛国者です。</p> <p>愛国とは殉国することでしょうか？戦うことでしょうか？愛国とは決して戦うことだけではないと思います。国の行く末を憂い嘆き、その先を行動すること、自国をあらゆる面で理解することも愛国心ではないのでしょうか。</p> <p>戦争の中で変わっていくことはたいへん沢山あると思います。変わってしまった物を、新しくする。新しい国として出発する。これでは、国を本当に守ることではないんじゃないかと思います。</p> <p>文化、伝統、国民性・・・・・・永代にわたって続いてきたものを捨て去った国は、それまでのその国と、同じ物と言えないでしょう。たとえ戦火に焼かれても、知識として残っていれば、再構築も可能でしょう。</p> <p>愛国心を抱くには自国を知らなければならないと思います。</p> <p>年齢を問わず、日本人は自国について（歴史、文化、伝統、政治・・・・）あまりにも知らなさすぎだと思います。これであっては自国に誇りは持てません。ましてや愛国心など。</p> <p>愛国心と言われても、思想統制を図った動きにしか思えません。</p> <p>日本で愛国心と言っていて思い当たるのは、ヤクザなどの右翼です。</p>
③韓→日 2007.11.7	<p>ご返事ありがとうございます。</p> <p>国が存在するため、国民を守らなければならないのは当然ですが、万一、自分の国で戦争が起きたとしたら、どうされますか？国が国民を守ってくれるのを待つわけにはいきなりですね。国民は国に対しての権利は持ってますが、無条件的な権利を望むなんて、それは違うんじゃないかと思います。国がなくなったら、国民もなくなるでしょう。</p> <p>そして、私たちは愛国という言葉が国のために戦争で戦うのを前提してると言っていないです。愛国心の一つの例として、韓国の国民はそうすると言いました。</p> <p>Hさんは、愛国心は思想統制を図った動きだとおっしゃっていましたが、それは昔の列強時代の愛国心の意味だと思います。</p>

	<p>愛国心、このままの意味をみると国を愛することだと思います。小さなことも国を愛することの範囲に入っています。</p> <p>韓国人はワールドカップとか国際競技がある時、我が国が勝ってほしいという気持で応援する人が多いです。このような行動こそ、愛国心のそのままの意味ではないでしょうか。</p>
④日→韓 2007.11.8	<p>そうですね。</p> <p>その通りかもしれません。実際に開戦すれば、徴兵とかではなく志願兵となるかも知れません。しかしそれは先に述べたように愛国心ゆえではないでしょう。</p> <p>皆さん韓国の方々は、幼少のころよりそのような空気の中で育ってきたので、愛国心と強く思うんだと思います。正直、僕は愛国心などと言ったことは考えたことさえありません。何となく思いついたことを書いてみただけなので、支離滅裂、言葉が続きません。ただ「愛国心って何」って言う疑問だけです。愛国心って言う言葉自体がしっくりと来ません。思想統制というのはおかしい表現でした。(以下の理由からそんなかんじに受けました。)</p> <p>論点はずれてしまいましたが、日本ではメディアの力が強大です。例えば、愛国心なる物を政治家などが言っているのを報道し、評論家や人気の芸能人、視聴率の高いニュースでそれを取り扱えば、その気運が現れれば、けっこう多くの国民がそっちの方向へなびきます。意図した物ではなくても、偏った考えとさせてしまう恐れがあります。逆に意図してそうすることも可能です(そのような動きが過去にあったかは別として、おそらくあったらうけど)。マスコミも視聴者の食い付きがよい情報に関してはしつこく報道します。かなり過大して報道することさえあります。これを見ってしまう人間が言うのはおかしいですが、うんざりです。どこの国にも言えることだと思うんですが、メディアや人の口からより多く発せられることって歪んだ形で固着してしまうことが多いと思うんですが。周りにあわせていないと不安、流行にのってないと駄目、みたいな国民性(とくに若者)が日本にはあるので、それも強く影響しているでしょう。韓国ではどうでしょうか？</p> <p>サッカー等の国際競技大会の時は日本も同じです。テレビの視聴率はワールドカップはスポーツとしては異例の高い数値を出しています。関心はあるし、勝ってほしいとも思います。</p> <p>しかし、それと愛国心って関係があるんですかね。出来事じたいをお祭りとして捉えているんだと思います。あとは、そのこと自体を好きとか。日本では、代表戦は高視聴率で満員だけど、国内リーグは中継さえせず、席も空席ばかり応援するのは熱烈なサポーター。代表の試合があると、ルールも何も知らない人が、ユニフォームをきて馬鹿騒ぎ。にわかファンが増殖します。腹立たしい。</p> <p>日韓大会の韓国の映像を見ていた時も同じように感じました。「この中に純粋に応援してる人って何人いるのかな」って。皆、応援しているにはしているけど、ただ盛り上がりたいたけなんじゃないかって。</p> <p>スポーツ、政治、科学技術、自動車産業、映画・・・・・・こういってことで自国が輝かしい成績を収めてほしいと思うことが愛国心といえるなら、日本人も愛国心の強い国民でしょう。</p>
⑤韓→日 2007.11.14	<p>そうですね。</p> <p>愛国心に対してどう思いますかと問えば韓国人もHさんのように思った事がないという人もいますし、興味がある人もいます。</p> <p>ところが、ワールドカップと愛国心って関係があるんですかねと言っていました、もちろん関係があると思います。Hさんが言ったようにただ盛り上がりたいたけの</p>

	<p>気持ちで応援している人もいるかも知れませんが、だいたいの方は韓国が勝ってほしいから純粋に応援しています。もし韓国がワールドカップで勝ったとしたら、それによってもっと多くの国に韓国を知らせることができる機会になって経済の発展にも役に立つと思います。こんなことも愛国心の中で一つだと思わないでしょうか。</p> <p>あと、代表の試合があると、ルールも何も知らない人が、ユニフォームをきて馬鹿騒ぎ。にわかファンが増殖して腹立たしいと言いましたが、それって韓国に腹立たしいと言ってるんですか。私たちは戦争がおきたら国を守ることも愛国心だと思いますが、文化を発展すること、歴史を知ること、スポーツ、政治、科学技術、自動車産業・・・で自国が輝かしい成績を収めこと、それだけでなく地下鉄で老人に席を譲ることも一つの愛国心だと思います。こういうところで見ると日本人も愛国心を持っていると思いますが、Hさんが思っている愛国心はなんでしょうか。</p>
⑥韓→日 2007.11.16	<p>僕はスポーツイベントなどに対してはとても冷静な目で見ていますので、韓国のそれに対して、日本のそれに対して、世界中のそれに対して腹立たしさを覚えます。</p> <p>ワールドカップアメリカ大会で、某国のスター選手がオウンゴールをしてしまい、自国に凱旋してまもなく熱烈なファンに射殺されるという事件が過去にありました。これはもちろんものすごくマイノリティーなことです。ヨーロッパなどではフーリガンが問題となってます。サッカー原因で本当の戦争になったことさえあります。スポーツ中継などで、チームにブーイング、相手に、審判に、相手サポーターに。国際大会であれば、自国の代表、相手国の代表・・・この方々は皆、国を代表して戦っているものであり、どんなプレーに対しても賞賛、激励こそされ、非難されるべきではない。これらはつまり、スポーツは娯楽でしかないと言うことです。</p> <p>個人の感情に起因する快不快の感情の捌け口なんでしょう。</p> <p>国際社会において、K O R E AやJ A P A Nの知名度が低い国はないでしょう。十分な教育の受けられない後進国はべつとして。何らかの効果があるとすれば、欧米からのアジアスポーツに関する見方が、多少よくなるくらいでしょうね。大イベントの開催国にでもなれば利益は計り知れないでしょうね。</p> <p>所詮スポーツはスポーツ。経済は経済。分別して考えるのが妥当でしょう。</p> <p>ずっと述べてきましたが、僕には愛国心などというものはわかりませんし、考えたこともない。仮に、自国を知り、行動を起こすこと、些細なことでも国に従事すること・・・それが愛国心だと言われれば否定はしません。肯定しろと言われれば、肯定もします。仮に。法律で「これが愛国心です。国民ならこうしましょう」となればそうします。これこそ思想統制ですね</p> <p>これはセンスの違いでしょう。</p> <p>そもそも日本では愛国心などと言うことを大びろげて言う、考えるなんてことはしませんから。 たぶん</p> <p>愛国心と言われて、戸惑わず発言できる人はいないんじゃないですか。 たぶん</p>
日(○)→韓 2007.11.26	<p>「愛国心を持っているか？」と聞かれて即答できる日本人は少ないと思います。</p> <p>まず、日本では愛国心を明確に理解している人が少ないと思いますし、僕も愛国心を具体的にどのような心かを説明することができません。僕が思う愛国心とは、家族や友人を愛するように、郷土を愛し、それが地域につながり最終的には母国の歴史や伝統、文化にまで広がっていくようなイメージがありますが、それを愛国心と言うのなら、僕は持っていると言えます。</p> <p>スポーツ観戦(国際試合での)に関して言えば、僕は日本と韓国の差を感じました。そういう意味では、日本人は愛国心が薄いと言うことができるでしょう。しか</p>

	<p>し、僕はそれらが愛国心と直接つながっているとは思っていません。2002年に日本と韓国の共催でワールドカップが行われましたが、選手もサポーター（応援者）も報道もすべて、日本人と韓国人の考え方の違いが如実に現れてしまった場面もありました。</p>
<p>日（M）→韓 2007.11.26</p>	<p>”愛国心”と言えば、固いイメージに聞こえますが、日本人に「日本は好きですか？」と聞いたらきつとほとんどの人が「好き」と、答えるでしょう。私も、そう聞かれたら答えは「大好き」です！理由は、食べるものがとってもおいしいし、お金も不自由ない程度にあるから欲しいものはなんでも買えます。（それは複数の望んだ物が全て買えるという意味ではなく、ある一つの物に対してならば一生懸命働けばなんでも買えるという意味です。家とか車とか高級料理とか。）そして、その収入を安定させられるため、一定の生活水準のままずっと生活できます。勉強がしたければ何でも勉強できますし、働こうと思えばいくらでも働けるし、夢があれば好きなだけ磨く事ができます。それに、最近では貧富の差（格差社会）が広がっていますが、他の国程ではありません。資本主義でこれだけ格差が少なければ、私は満足です。</p> <p>ただ、最近ひとつだけ「好き」と呼べなくなりました。それは、国の名前です。</p> <p>”日本”の由来は、”太陽が一番最初に昇る国”から来ています。確かに、日付変更線の位置からしたらかなり早いほうですが、実際にはそうじゃありません。現在一番最初に日が昇る国はキリバス（ミレミナム島）です。ただ、この国は今温暖化の影響で島が海に沈みつつあります。そうなると”日本”でいいような気がします…とにかく、この名前で「日本は日の出の早さ世界一！」とか言う勘違いした人がいるのは悲しい事です。ちなみに、この話を周囲の人にとすると、「まあいいじゃん」とか「細かいよ～」とか言われます。それだけ歡樂的な考え方の人が多いです。平和ですね。日本人は、嫌う意識より好く意識を好みます。こういった、ほんわかった日本の考え方や雰囲気は大好きです。他にも、お祭り事が大好きなので、今はクリスマスの飾りが町を彩っています。綺麗ですよ。日本人にキリシタンはあまりいないんですけどね（笑）</p> <p>本当に個人的な意見なので、他の人の意見も参考にして下さい。</p>
<p>⑦韓→日 2007.11.28</p>	<p>Hさん、Oさん、Mさん ご意見ありがとうございました。やっぱり愛国心についての話は国によっても人によってもその意味と深さが違いますよね。Hさんと同じ意見を持っている方々は韓国でも相当いると思います。ヨーロッパ、南米などサッカーが人気がある国ではワールドカップで勝利すると全国民が喜んで負けると大部分の国民が惜しがります。Hさんが言ったとおり、サッカー原因で本当の戦争になったこともあります。これらはただの娯楽とか、個人の感情に起因する快不快の感情の捌け口では説明できないと思います。センスの違いでしょう。</p> <p>もう韓国は2学期が2週間しか残ってないんです。愛国心についての話はこれでおわらせていただきます。</p> <p>Hさんにもう一つ聞きたいことがあります。</p> <p>韓国では就職のために一番必要なことはTOEIC点数です。その次で重要なのが出身大学、学科成績、資格証、外貌です。日本も英語の能力が重要ですか？日本で就職のために一番必要なことは何ですか？</p>
<p>⑧日→韓 2007.11.28</p>	<p>疲れました。</p> <p>愛国心は難しかったなあ。</p>

	<p>日本でも英語は重要です。(いい企業にはいるためには) T O E I C 何点以上が応募資格という風になっていたりします。</p> <p>話を聞いていると、日本は韓国よりは学力至上主義ではないと感じいます。東京大学卒業者と高卒者が机を並べて働いているということもあったりします。(給料は違いますけど) 良く言いすぎですが、その人の内在的能力だったりするんじゃないでしょうか。低学歴と高学歴、どっちが仕事の能力、人間としての能力に優れているかなんてわかりません。それを見抜くのが人事の仕事でしょ!!! 最後は熱意だったりするんじゃないですか。</p>
⑨韓→日 2007.12.5	<p>お疲れ様でした。 愛国心って難しいですね。私たちも愛国心についてそんなに深く考えたことがなかったから難しかったです。でも、今回のきっかけで日本人は愛国心についてどう思っているか分かったし、私たちもそれについて考えるようになっていい経験でした。</p> <p>やっぱり日本も英語が重要ですね。最近は英語できないと就職するのに限界がありますね。</p> <p>短い間でしたが、こうやってメールで交流できて良かったです。今までどうも。お元気で、^^</p>